

シンポジウム

国語学とアイヌ語学の分岐点

——金田一京助と知里幸恵——

西 成 彦

本日のシンポジウムは、只今、一階の中野記念ホールで開催中の「知里幸恵——シロカニペランラン・銀のしずく降る降る展」に連携して、国際言語文化研究所が研究所全体として取り組むことになった企画です。もしまだ展覧会をご覧になっていらっしゃる方には、中休みのあいだにでも、ぜひ展示をごらんいただきたいと思います。今日はちょっと長丁場のシンポジウムになるかと思いますが、順番としては、ここにお座りいただいております丸山先生からお話ししていただき、続きまして安田先生、そしてその後ブレイクということにしたいと思っています。

さて、今日の話題の中心は、大正12年、1923年夏、関東大震災の前夜の東京で刊行された一冊の本と、この本の中で、アイヌ伝承の翻訳者であると同時に、編者としても、責任を負うことになったひとりの日本人アイヌ女性です。今回の展覧会でも、この小さな本が展示の核をなしています。昨年2003年はこの編訳者、知里幸恵の生誕から百年を数える年でしたが、『アイヌ神謡集』の刊行年から数えると、昨年は81年目でした。今日敢えて、この小さな本を取り上げるとすれば、この本がこの八十数年のあいだ、だれによって、どう読まれてきたのか。この問題を避けて通ることはできません。

それから、もうひとつ、この作品が1923年、出版されるに至ったその時点、またそれが出来上がるプロセスにのなかで、当時の日本の教育や、国語学や言語学といった学体系がどんな制約やフレームをつくりあげていたのか。その生成の現場にも思いを馳せないではおれません。

今日は、まずお三方の報告をいただいた上で、最後の1時間ぐらいを会場の皆さんとの質疑の場へと開きたいと思います。

紹介が遅れましたが、私は今日司会をさせていただきます立命館の先端総合学術研究科の西と申します。私の専門領域は、比較文学なのですが、私からすると、『アイヌ神謡集』は、もともと制作年代も作者も特定不能な口頭伝承が、あるひとりの「バイリンガル」——敢えてこの言葉を使いたいと思うのですが——、つまり日本の北海道占領＝統治のプロセスの中で、アイヌ語という母語の上に日本語という「国語」を半強制的に焼き付けられたひとりのバイリンガル女性の手を借りて日本語に置き直され、しかも、もともと文字を持たず、それを文字で書き取るにあたっての正書法が定まっていなかったアイヌ語のローマ字表記をも添える形で、まさにその楽屋裏を全部見せるという趣向で出来上がったテキストです。このような文学性と同様に記録性の面でも重要な歴史的価値を持つテキストというものは、大航海時代以来、さまざまな言語と言語のあいだに橋を架けるようにして無数に生み出されてきたわけです。まだ、文字言語を必ずしも持っていない、そして、植民地統治等の結果、緩慢な死を生きることになった

諸言語を、「国語」なる規範を擁する近代国家、或は、帝国は、失われ行く言語をそのまま略奪するのではなく、その原型を痕跡としてとり残す身振りとともに、その楽屋裏をこそ強調しながら、書物という媒体を用いるのです。しかし、知里幸恵の『アイヌ神謡集』の特徴のひとつは、それがアイヌ語を学習した宣教師や学者の手でなしとげられたものではなく、むしろ「国語」を習得した少数民族出身者自身に、記録・翻訳の責任をおしつける形で成立したテキスト——もっといえば、アイヌ学者、金田一京助が仮に知里幸恵をインフォーマントとして用いることはあったとしても、その学的権威に基づいて、みずからの責任において果しても決しておかしはなかったはずの作業責任を、ことさらにひとりの少女にわりふることによって完成したテキストだということです。よく言えば、花を持たせる、悪く言えば、責任を転嫁する強い意志が金田一の側にあって、そのはたらきかけや教唆^{そそのかし}に対する精一杯の応答として完成したのが、この『アイヌ神謡集』なのです。

いま『アイヌ神謡集』は岩波文庫の赤帯シリーズで簡単に手に入りますが、これを「外国文学」として扱うべきか否か以上に、私が注目したいのは、同じ岩波文庫の赤帯に、金素雲選の『朝鮮民謡選』や『朝鮮童謡選』が収められているということです。これらは昭和初期、正確に言えば、1929年と1933年にそれぞれ刊行されたものが母体なのですが、金素雲は、知里幸恵よりも五年遅れて、1908年に生まれています。1919年の三・一独立運動では「少年団」を結成してまで戦ったひとりのナショナリスト青年が、翌年、大阪にやってきて、その後は、東京・大阪・釜山を歩き来しながら、日本語詩人としての一步を歩み始めます。こんな今で言えば「在日作家」ですらありうるような朝鮮人詩人の類まれな才能が開花した結果が、いまではこれらの訳詩選なのです。

知里幸恵と金素雲。かたや最初の本が出る前に19歳の若さで夭折し、かたや第二次世界大戦後まで生き延びて、二つの言語で旺盛な執筆力を誇った。この二人を「同時代人」として見るものの可能性——そんなことを考えたりしています。ともかく、日本の帝国大学の中で日本人によるアイヌ語研究、あるいは朝鮮語研究のルールが引かれる中で、かならずしも言語学の教養を持つわけではない二人の「ネイティヴ」が、こうした民衆文化の保存というよりは剝製化のための作業に動員された。二人ははたしてこうした作業に快く動員されていたのか、それともこれを苦行として受け取ったのか。ほんとうのところはわかりません。しかし、こうしたテキストを前にしたとき、私たちはただ手放して拍手を送りつづけるわけには行かないように思うのです。

いったい、こういったテキストにおいて、「編」とか「選」といった言葉は何を意味するのでしょうか。私も本を何冊か出したことがあります。その場合には、かならず編集者という介添人、というか産婆のような存在がいて、その場合、編集者と著者というのは、ある意味では、非常に生臭いというか、もつれ合った関係を経ながら、最後に本が生まれ落ちる。同じように、『アイヌ神謡集』の場合は、金田一京助という帝国大学の老先生が、序文というか弔辞のような文章を書き、夭折した知里幸恵の紹介者、および葬儀委員長のような資格で姿をあらわし、みずからの名前をこの本の片隅に署名しています。しかし、その金田一がこのテキストの背後で、彼女の仕事をどのようにあおぎ、あおり、どのように引き受けて、どのような枠組みをこしらえたうえで、その遺産を継承し、共有物化したのか。編集者以上の大きな遺産相続人

の仕事をして、ここでは金田一がすべてなしとげているわけです。ですから、このテキストを読む時に、知里幸恵の背後で金田一がどのようにふるまったのか、このことはきちり押さえていかないと、たぶん、この作品をしっかりと受けとめることはできないだろうと思います。

じつは、本日お招きした丸山隆司さんは、そういったところを、『「アイヌ学」の誕生』（彩流社）というご著書の中で丹念に分析しておられ、まずは丸山さんのお話をうかがった上でしか今日の議論は始められないと思います。丸山さんは、藤女子大学の文学部長でいらっしゃいまして、今日も、本当に多忙なかをお越しいただきました。そもそもは、古代日本語研究がご専門でいらっしゃる、今年出版されたばかりの『古代日本文化と文字』（おうふう）という著書もお持ちです。しかし、ご本人自身も、いまではどちらが本業なのか、もはや分からなくなってきているとおっしゃっておられるように、とくに北海道の大学で教鞭をとられるにあたって、日本語学とアイヌ語学の接点というか、境界をめぐって考えることは、おそらく使命のひとつだと考えておられるのではないかと推測するしだいです。

つづきまして、一橋大学の安田敏朗さんを紹介します。安田さんはたくさんの著作をお持ちですが、たとえば『帝国日本の言語編成』（三元社）というタイトルが示しているように、たださまざまな言語や方言が分布しているというだけではすまなくなった、大日本帝国という政治的な空間のなかで、国家や言語学の体系が「言語編成」にどう作用することになってきたかということを徹底的な言説分析を通して浮かび上がらせる、言語学者というよりは、筋金入りの歴史学者だと私は思うのですが、今日はこの安田さんの側から、丸山さんの話への緻密な応答をお願いできないかということでお招きしました。

そして、最後に本学先端総合学術研究科大学院博士課程の学生、佐藤奈奈さんから、知里幸恵の六歳年下の弟で、しかも金田一京助の下で言語学を修め、戦前から戦中にかけて、アイヌ研究のなかでも目立った功績を残した知里真志保について、とくにアイヌ語のオノマトペー、要するに身体性を強く残した言語表現に対する配慮に関してお話いただき、そこから溯って『アイヌ神謡集』のなかのオノマトペー表現についての議論に向けての口火を切っていただこうと考えています。

それでは、丸山隆司さんから宜しく願います。